2017年10月15日

中原キリスト教会

**「サウル王の罪」**

聖書箇所：第一サムエル15:13－25

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

　本日はイスラエルの初代の王サウルの生涯をみます。お読みいただきました箇所はサウル王が王座より外されることが決定的になる場面です。まず、サウル王登場の背景からかいつまんでご説明いたします。エジプトの新王国時代にピラミッド建築など奴隷として労役に従事されていたイスラエルの民はモーセに率いられカナンの地に向かいます。そしてモーセの後継者ヨシュアをリーダーとしてカナンの地に侵入します。しかしなかなかスムースにその地を占領することはできませんでした。ヨシュアのあと、聖書では士師と呼ばれる軍事的・政治的指導者のもとでその地を自らの住む土地にしようとしました。一時期成功することがあっても長続きしません。その中で、預言者であり祭司であるサムエルという少年に主なる神が現れ、主なる神への信仰を告げられます。これは主なる神に信頼すれば諸国に対し勝利を得られる、という告知と理解されます。サムエルは神の言葉をイスラエルに告げます。イスラエルの部族連合はペリシテ人との戦いに臨みますが惨敗致します。イスラエルの民は、他国のように「王」という指導者がいないから敗北したのだ、として、自分たちにも「王」をたててください、とサムエルに願います。サムエルは「王」をおくことに消極的でしたが、民の声におされ、ベニヤミン族のサウルを王としてたて、油注ぎ、イスラエルの王と宣言します。

　更に進む前に当時の国際情勢について述べておきます。まず、エジプトです。モーセの出エジプトは第19王朝の時で新王国の盛んな時期です。しかし、サウルが王となった時期は第21王朝の時代であり、新王国エジプトは衰退期に向かっています。その後リビア人の支配、内乱時代、エチオピア人の支配などが続きます。リビア人王朝の時代にシリア出兵の記録がありますが、カナンの地を継続的に支配していく力はとてもありません。次は東方のメソポタミア地域です。ハムラビ王で有名な古バビロニア王朝は高い文明を築いていましたが対外的に勢力を拡大する力はありませんでした。北の方角ではアッシリアが強くなろうとしていました。アッシリアは今のトルコ東部、イラク北部、シリア東部にあったミタンニ王国を併合し、第一隆盛時代を築こうとしていました。ちなみに、ミタンニ王国のあった地域は今所謂「イスラム国」の支配やクルド人の居住地となっている地域です。アッシリアは、南のシリア・カナン地域に拡大していくか、東方の古バビロニアの地域に拡大していくか、という時代です。あと現在のトルコの地には鉄を最初に兵器として使ったことで有名なヒッタイト王国がありましたが、ギリシャに押されトロヤ戦争で敗北し王朝は滅亡していました。このような勢力図から、カナンの地は南のエジプト、北の新興アッシリアの中間にあり、小康状態を保っていた時期にあった、と言えると思われます。しかし、アッシリアがどんどん力をつけてきており、いつ、カナンの地に進出してくるか解らない、という国際情勢にありました。カナンの地は北に海洋民族で有名なフェニキア、西にペリシテ人の王国に挟まれ、原住民はそれらから移住してきた部族達で、そこに、エジプトを脱出してきたイスラエルの民が侵入してきた、という構図です。当然戦いになりますし、宗教も地場の宗教とイスラエルの宗教の相克が不可避です。

　サウルが王となる記事は第一サムエル記9-10章に記されています。当時「神の人」とも呼ばれた預言者であり祭司であるサムエルからイスラエルの王に任ぜられます。サウルは「美しい男で---民のだれよりも、肩から上だけ高かった」といわれていますが、特別な能力を持っていた、とか軍事的・政治的実績があった人物という訳でもありません。完全な神の選びです。おそらくは、当初は“自分はなにも誇るべきものはないのだけれども主の選びによってイスラエルの王となった”と理解していたでしょうが、権力の魔力はそれを変えてしまうのは後にみるとおりです。謙虚な人間が権力を持つと高慢な人間になる、という例は人間の歴史のなかで何百万とあるでしょう。もう一点注意すべき点は政治と宗教の関係についてです。10:19でサムエルはイスラエルの民にこう言っています。「あなたがたはきょう、すべてのわざわいと苦しみからあなたがたを救ってくださる、あなたがたの神を退けて、『いや、私たちの上に王を立ててください』と言った。今、あなたがたは、部族ごとに、分団ごとに、主の前に出なさい」。要するに、イスラエルの民は神を退け、王を求めた、と言っているのです。あくまでも権威は主なる神にあり預言者は主の言葉を取り次ぐ者にすぎません。サウルが王になる前は士師というカリスマを持ったリーダーが部族連合を率いてイスラエルを導いていたのです。士師も基本的にはまとめ役にすぎません。これに対し、王は部族の長とは上下の関係にあり、時には部族の長を飛び越えて民に命令を発します。その王が宗教的権威と政治的・軍事的権力を掌握すると簡単に独裁国家になってしまいます。従って、イスラエルの伝統は王は許容するにしてもその権威の源泉はあくまでも神にあり、そのメッセージを告知するのは神の言葉を預かる預言者・祭司即ち宗教的権威者です。王と祭司の兼任は許されません。宗教的権威者はむしろ常に王に対する批判者として登場するのです。この政治と宗教の関係の問題は今にも続いている大問題ですが、イスラエルの伝統は王と祭司の兼務を許さない点にある、ということは肝に銘じておく価値があります。王が祭司の役割も果たすとか、大祭司が王の座にもつく、ということがイスラエルの歴史にも現れ、その時は必ずイスラエルにとって悲惨な結果になります。現代社会は政教分離に名を借りて、政治的・軍事的指導者が宗教的権威を持つ者の忠告・批判を全く聞かない状況になっています。特に日本の状況はひどい、と言わざるをえません。このようなことは、必ず神の裁きを招くと思います。ここで注意すべきことは、旧約の思想では、指導者の罪は、共同体の罪と見做されるということです。従って、指導者が神の御旨に反したことをした結果は共同体全体に罪の裁きが与えられる、ということです。ダビデの罪はイスラエル全体への裁きとなります。

　さてサウル王は王となってからアモン人と最初の戦いを致します。アモン人はアブラハムの甥ロトの末娘が父の寝ている間に子をもうけた、というベン・アミの子孫ということになっており今のシリアの首都アンマン（当時はラバ）の近くに住んでいた部族です。サウルはイスラエルを招集し、ヨルダン川東のヤベシュ・ギルアデでアモン人を破ります。そしてヨルダン川西のギルガルで民衆の信を得て、正式に王への就任儀式を行います。サムエルは再びイスラエルの民が王を望んだことの罪を指摘するとともに、王を含め主なる神の命に従順であることを勧告します。それに従わなければ神はイスラエルを敵の手に渡す、と警告します。

続いてサウル王はペリシテ人との戦いのため再度イスラエルを招集します。当時ペリシテはガザ、エクロン等５つの都市がありその都市連合は強力でした。そして彼らも大軍を招集し、死海の西北ミクマスに集結します。勢力は圧倒的差です。そこで問題が起きました。サウルは預言者サムエルが待っても来ないので民が離反して離れていくのを阻止するため、ギルガルで全焼の生贄を奉げる儀式を執り行ったのです。その直後にサムエルが着きます。ここでサムエルは祭司なき状態で全焼の生贄の儀式を執り行ったことを責め、「今は、あなたの王国は立たない。主はご自分の心にかなう人を求め、主はその人をご自分の民の君主に任命しておられる。あなたが、主の命じられたことを守らなかったからだ」と言われます。「主なる神が戦われる」戦いであるから主の言葉を待つべきにも拘わらず、自分勝手に戦いを開始しようとしたことが大罪と認められているのです。サムエルはギルガルを立ち去ります。その中でもサウルはペリシテに戦いをいどみます。息子のヨナタンが部分的ながら戦闘に勝利します。しかし、民は疲れていて血のままで羊、牛等を食した。ここで律法違反の罪を犯しました。食するには血をぬかねばならないのです。またヨナタンが告白します。14:43にヨナタンの言葉で「私は手にあった杖の先で、少しばかりの蜜を、確かに味見しましたが。ああ、私は死ななければなりません」とあります。戦勝により得た一番良いものを神に捧げるべきところを若干とって味見をしてしまった、というのです。サウル王はこのようなことをした者は死ななければならない、と先に、神に誓って宣言していました。しかし、死に値する罪であるところを民衆の「助けるべきだ」との声におされて罪に問う事をしませんでした。ここに後のサウル王の罪の伏線があります。その後、ペリシテ人も故郷に帰り戦闘は一時停止します。しかし、ペリシテ人との争いはずっと続きます。

　15章に入ると、今度はアマレク人です。イスラエルの祖ヤコブの兄エサウの子エリパズの子ということになっており、その子孫は死海の南エドムの地に住んでいました。この部族は出エジプトの民がカナンの地に向かおうとしていたのを妨害し、攻撃を仕掛けてきた部族であり、イスラエルの宿敵でした。15:3には主の言葉が記されています。「今、行って、アマレクを打ち、そのすべてのものを聖絶せよ。容赦してはならない。男も女も、子どもも乳飲み子も、牛も羊も、らくだもろばも殺せ」と言うものです。聖絶とは「焼き尽くす」とも訳され、要するに神の名において完全に殺す、ことです。そしてサウル王はイスラエルを招集します。アマレク人といっしょにケニ人の部族がいましたが彼等は出エジプトの民の邪魔をしなかったのでサウル王はこれを許したのです。ケニ人はアマレク人から離れました。おそらく勢力はかなり落ちたものと推察されます。そしてイスラエルはアマレク人に勝利し、「アマレク人の王アガグを生け捕りにし、その民を残らず剣の刃で聖絶」しました。ここで再び問題が起きます。9節で「サウルと彼の民は、アガグと、それに、肥えた羊や牛の最も良いもの、子羊とすべての最も良いものを惜しみ、これらを聖絶するのを好まず、ただ、つまらない、値打ちのないものだけを聖絶した」とあります。最上のものを神に捧げるのではなく、それは自分たちのものにし、それ以外を神に捧げるものとして「聖絶」したというのです。11節でサムエルは言います。「わたしはサウルを王に任じたことを悔いる。彼はわたしに背を向け、わたしのことばを守らなかったからだ」とあります。サムエルは怒り、夜通し主に向かって叫んだ、と言われています。ここで「悔いる」として使われている言葉はヘブル語で「ナーハム」という動詞で新約で「悔い改める」という時の言葉のもともとの単語の一つです。また「怒る」というのは「ハーラー」と言う動詞で「神が怒る」という時の怒る、と同じ言葉です。そしてまた、サウルはカルメルに行って、自分のために記念碑を立てた、と言われています。これも、すべては神の力によることとなので勝利は神の栄光に帰すべきところを自分の栄誉にしようとしたことを示しています。

そして本日の聖書箇所になります。13節でサウルはサムエルに言い訳を言います。「主の祝福がありますように。私は主のことばを守りました」と言います。日本でも言い訳は恥の上塗りと見られていますが、聖書では言い訳を言うのは悔い改めの逆ですから、罪の上に罪を重ねるものと見られています。更に15節でサウルはアマレク人から奪って連れてきた最上の羊と牛を示し、「アマレク人のところから連れて来ました。民は羊と牛の最も良いものを惜しんだのです。あなたの神、主に、いけにえをささげるためです。そのほかの物は聖絶しました」という言い訳を続けます。サムエルは21節で「民は、ギルガルであなたの神、主に、いけにえをささげるために、聖絶すべき物の最上の物として、分捕り物の中から、羊と牛を取って来た 」とサムエルに告げています。そして、22-23節に宣告が記されています。もう一度お読みします。「主は主の御声に聞き従うことほどに、 全焼のいけにえや、その他のいけにえを 喜ばれるだろうか。 見よ。聞き従うことは、いけにえにまさり、 耳を傾けることは、雄羊の脂肪にまさる。23 まことに、そむくことは占いの罪、 従わないことは偶像礼拝の罪だ。 あなたが主のことばを退けたので、 主もあなたを王位から退けた」とあります。要するに生贄を奉げることではなく、主なる神の言葉に聞き従うかどうかの問題だ、というのです。最上のものをささげるのは神に感謝し、へりくだり聞き従うことを意味しますから、最上のものを民が自分のために取る、というのは不信仰の証である、と言えるでしょう。今回の場合は主なる神の聖絶命令に違反する、という形で不信仰が示されました。注意を要するのは民衆が行った罪もサウル王の罪とされていることです。指導者は部下の責任も自己の責任として引き受けなければならない、ということです。原発事故で自分は予測できなかったので責任はない、とか言っている東電元社長等にはうんざり、です。あれだけの事故を起こしておきながらトップが責任なしで済ませられる訳がありません。自分から有罪を申し出るべきです。もっとも私は本人は重大な責任を感じているけれども回りが無罪にしたいのだと思ってはいますけれども。旧約聖書ではイスラエルの指導者と民の関係はこのようになっています。民の罪はそれを回避させることができなかった指導者の責任です。また逆に指導者の罪はイスラエル全体の罪と見做されます。旧約の最後の方で、個人の信仰が共同体の信仰と別に語られるようになりますが、このサムエル記の時代は一般民衆は共同体の一部です。この原理を今の日本にそのまま適用されたらおそらく日本と言う国は既に神によって滅ぼされていたのではないか、と思います。国の指導者と自認している政治家たちの罪の結果が日本国民全体にかかってくる、ということです。この問題は、ナチスとドイツ国民との責任関係の問題として、ドイツのキリスト教会でも大きな議論になったところです。日本人のアジア・太平洋戦争における加害責任の問題です。朝鮮戦争、ベトナム戦争において間接的に加害者であったことも事実です。日本経済はこれによって復興・成長した、と言って過言ではありません。

24節でサウルは悔い改めの言葉を言います。しかし、「民を恐れ、彼らの声に従った」という言い訳も口にします。そして再び主の選びはサウルには戻ってきませんでした。こうしてサウルは先ほどのアモン人との戦いの時と同様主なる神の言葉に厳格に従わなかったことが再度繰り返され、決定的場面を迎えることになってしまいました。その後、ダビデが王として指名され、サウル王とダビデの戦いの場面になって行きます。戦いというよりサウル王の追跡から逃れようとするダビデと言えます。ここで残された問題につき、一言しておきます。「聖絶」に関して、です。なぜ、イスラエルの神はこのような残虐なことをしろ、と命ずるのだろうか、という点です。いろいろな解釈があります。それは「聖戦」という「神の名に依る戦争」をどう考えるのか、ということに密接に関連します。プロテスタント神学の通説は、“旧約の当時は純粋信仰を保つため異民族との戦争そして聖絶も許されたが、新約の時代にあっては神の名に依る戦争やましてや聖絶など許されない”というものです。イエス様の到来により理解を転換するのです。このことを考えるに際し、前提として理解しておくべきことがいくつかあります。①実際に、文字通りの「聖絶」が行われた形跡はありません。一般民衆、家畜すべても皆殺す、ということはあるはずもありません。おそらく、指導的立場にあった人々、家畜はある程度の数の家畜で代表させる、ことであったろうと考えられます。「聖絶」は宗教的意味が重要ですので、象徴的な出来事で実効性が担保されれば十分なのです。②「聖絶」という言葉はヘブル語の「へ―レム」ですが、この言葉が多数使われているのは申命記、ヨシュア記、サムエル記です。なかでもヨシュア記に最も多くでてきます。イスラエルという国の出来上がる頃の歴史において良く使われているのです。これは「神の言葉」に忠実でなかったため、イスラエルの国は滅び、捕囚の民、離散の民となった、というイスラエル正統派の歴史観を反映しています。しかし旧約聖書はこのような歴史観のみならず、全能の神はイスラエルの試練として苦難を与えているのだ、という理解や、必ずいつかイスラエルを救う者が現れ、離散の民を主なる神が呼び集め、世界の支配者にしてくださる、とかいろいろな歴史認識が見られます。従って、主なる神が聖絶を命じた、という理解は旧約聖書著者すべての理解ではない、ということです。主なる神の言葉をどのように理解するかは聖書著者により異なることがある、ということです。その意味で、私たちは、「聖絶」命令をサムエル記著者と同じに解釈しなければならない、という必要はありません。

しかし、聖書を「誤りなき神の言葉」と信ずる我々にとってはこの「聖絶」、「聖戦」をどう理解するかは重大問題です。先日、ヨシュア記からのメッセージ取次の際、若干私見を申し上げました。まだ完全に理解できている訳では全くありませんが、イスラエル民族の創成から王国滅亡の歴史的文脈の中でこれらの理解をする必要がある、ということは確かであろう、と思います。一切のけがれをとりのぞく宗教的象徴行為としての「聖絶」から、イザヤ書に示された自らを「聖絶」の対象とする「苦難の僕（しもべ）」にむかうイスラエルの救済史が旧約の信仰です。また「神が戦われる」という「聖戦」が人間の罪の結果として、神なき、殺し合いとしての戦争となり、その究極において、預言者、ミカ、イザヤの軍事力を放棄した神の民イスラエルへの希望が示されるのです。この希望は神から預言者への言葉として与えられました。神の約束です。従って、現実のものとなることが確実な「約束」です。その意味においてこの平和への「希望」は現実のものです。お互いに交渉しながら軍縮をし「平和」を維持する、などという人間の良識に頼った「平和」はまやかしです。より残虐な武器を造ることになるだけです。キリスト教現実主義などというアメリカの神学者の言説はキリスト教の風上にもおけません。軍事力、武器の放棄は一方的なものなのです。神の約束に100%の信頼をおくキリスト者こそこの意味が理解できるのです。その意味で日本国憲法9条「戦争の放棄」はそれを言い表している、と言えます。もっとも、小国ではありますが、“軍隊を持つことはお金の無駄遣い”という世俗的理由での軍隊不保持の国も増えてきています。その出発点は9条でした。それも神様の御心だと思います。

この「聖絶」「聖戦」の問題は、聖書神学のなかでも最高の難問ですので私自身十分納得できる説明ができる訳ではありません。理解が困難な箇所は無理に解釈するより、保留にしておく方が良い、という場合もあります。但し、今日のサウル王の罪については神の前で謙虚になり、自らを低くし、神の言葉に聞き従う信仰者の本来の姿を見失った時、神の裁きを呼ぶことになる、特に指導的立場の人間は尚更の事、謙虚になる必要がある、ということを学ぶ鏡としての意味がある、ということだ、と思います。私たちキリスト者は常に自らを振り返り高慢の罪に陥っていないか反省する必要があります。祈ります。

（ご在天の父なる御神様、今日の学びを感謝致します。サウル王の高慢がイスラエルに何を齎したに想いを致す時、実に、サウルと同じ我々を見出すものです。神の言葉への忠実は、神の約束への信頼の証です。まわりがどうしているか、とかこれをすると損するか得するかは無視して、ただ我らの主の御言葉・御業に従う者とさせて下さい。イエス・キリストのみ名により祈ります。アーメン）